

「日本の酪農の違うところ(前編)」

こんにちは。僕は家畜飼育隊員として牧場で働いていることから、今回はアドバイザーとしての視点から見たマラウイの酪農を伝えたいと思います。酪農に関わった事のある方は驚くことばかりだと思います。

ここマラウイでは、マラウイゼブーや、ブラーマンといった在来の牛とフリージアンがいます。このフリージアンというのは、日本でホルスタインと呼ばれている白黒模様の牛と同種ですが、マラウイではホルスタインと言っても通じません。もう少し詳しく説明しますと、アメリカで改良が進み体高(背)の高い品種をホルスタイン、イギリスで改良が進み、胴が太いものをフリージアンと呼びますが、イギリスの統治下にあった名残からフリージアンと呼ばれているのかも知れません。

ここマラウイはサバンナ気候であるにも関わらず、配合飼料などの給餌をせず、餌は全て放牧中に牛が食べる草に頼りきっています。そのため乾季は餌が本当に無いそうですが、僕の牧場では牧草用品種を使うでもなく、雑草を食べさせるのみですから栄養は足りておらず、それに加え、水も与えていません。

搾乳牛にも水を与えず、低栄養価の配合飼料を少し与える程度、そして乾乳(乳搾りをしない回復する期間を作ることで、次の搾乳期間も泌乳を続けさせること)の知識があるにも関わらず搾乳を続けて、現在搾乳開始から 17 ヶ月目になっている牛もいます(普通は生理的なものと経営上の問題から、搾乳は分娩後 10 ヶ月までです)。お腹にはもちろん次の仔がいるのですが、乾乳をなかなかしようとしません。やはり、目先の利益を失うのは抵抗があるのだと思います。

搾乳の際、日本では乳頭を拭くタオルは 1 頭 1 枚使用し、病気の伝染や、牛乳への混入を可能な限り防ぐといった衛生管理に努めています。これに対しマラウイではタオルは使い回し、ゆすぐバケツの水も替えないといった衛生面の問題も見受けられます。日本を初めとした酪農振興国では機械を使って搾乳をしているのですが、彼らは手作業で乳搾りを行っています。

また、この牧場は牛乳を近隣から集める場でもあるため、約 220 軒に及ぶ近隣農家が牛乳をバケツや、ペットボトルに入れて 2-3 km の道のりを徒歩、もしくは自転車で乗り付けて朝・夕の 2 回運び込んでいます。これは彼らの貴重な現金収入です。

分娩は放牧地で自然に行われるのを待つのみで、分娩時も人は立ち会いません。その後、親子を小屋に移すのですが、移さないこともあります。もし移動させる際も、仔牛の脚の 1 つを引っ張り、引きずって連れて行くのですから心配でなりません。生後 3 日で親と離しますが、牛乳は 20 週まで与えています。牛の餌の量は、成長する為に必要な栄養を十分に採るには程遠く、その結果、成長が遅く全体的に小型です。どれだけ小型かというと、アメリカ由来のホルスタインの血を純

佐藤 健大さん(平成 23 年 4 月)

牒に引くにも関わらず、初産年齢が生後 4 年目という値が僕の任地である国立牧場では平均的です(普通は生後 2 年目です)。分娩間隔も 2 年半が平均的であり(普通は 1 年程度です)、牛乳の生産は 1 日 8 L が平均と、彼らの能力からしたらとても低いものです(日本では 1 日平均 26 L、中には 40 L 以上も生産する牛もいます)。

また現在、マラウイ国内では牛への人工授精の際に使用する凍結精液ストローが一部でしか流通しておらず、液状精液ストローや自然交配が主になっています(日本では凍結精液ストローを使用した人工授精の普及率はほぼ 100% であり、この技術によって牛を妊娠させます)。それは、当牧場が保有する液体窒素製造機が国内で一番大きいのですが、故障したまま 2 年近く稼動していないため、凍結精液ストローを作成することが出来ないという大きな問題があります。個人経営の牧場が保有しているストローもあるのですが、値段が高く、お金に余裕のある人しか手に入れることができない状況です。民間会社にもあるのですが、やる気があり、しっかりとした経営が出来ていて、なおかつ支援しているミルクバルキンググループ(日本で言うところの農協のような存在です)に所属していないとその恩恵にありつけないといった問題もあります。

このように、まだまだ改良する点がたくさんあるマラウイの酪農ですが、僕がマラウイで活動を続けられる 2 年間の間、より良い方向へ引っ張り上げるための活動を精一杯行いたいと思います。



分娩直後のブラーマン



人工授精



搾乳